学 会 名	リハビリテーション・ケア合同研究大会 （ 2023年10月26日～27日）
研究テーマ	家族を含めたチームアプローチの実践により、経口摂取と嗜好に合った食事の獲得に至った重症急性硬膜下血腫後の一例
病 院 名	医療法人社団健育会　ねりま健育会病院
演　　者	○松本優貴（作業療法士） 遠藤春菜(理学療法士) グラハム亮子(言語聴覚士) 二瓶太志（作業療法士）

概　　要

【序論】急性硬膜下血腫を呈した高齢者に、残存機能評価を基にした目標設定を行い、家族を含めたチームで関わった結果、経口自己摂取と嗜好に合った食事の獲得に至った症例を報告する。

【症例紹介】90代女性、右急性硬膜下血腫術後で第81病日目に当院へ入院された。意識障害（JCS II－10）、左片麻痺（BRS上肢、手指、下肢共にI）、プッシャー症候群の残存を認め、modified Ranking Scale（mRS）は5点であった。食事は嚥下機能の低下（摂食・嚥下Gr.3）から経管栄養で、Functional Independence Measure（FIM）は運動項目13点、認知項目10点であった。家族の希望は、経口摂取が出来ることであり、本人の摂食意欲と嚥下能力評価を基に、目標を経口自己摂取が出来ると立案した。

【経過】治療内容として、積極的な機能訓練と、本人・家族と密な情報共有を行い、6ヵ月の経過で、左片麻痺は残存（BRS上肢、手指、下肢共にII）したが、意識障害が改善し清明となった。嚥下機能も改善（摂食・嚥下Gr.10）し、常食の自己摂取の獲得に至り、本人が希望した鰻の差し入れも安全に摂取が可能であった。mRSは4点、FIMは運動項目22点、認知項目14点と向上を認めた。

【考察】症例は高齢且つ、意識障害を認め機能予後は不良とされたが、適切な残存機能の評価と症例に合わせた目標設定を行い、家族を含めたチームアプローチを実施出来たことで、食事等のADLが獲得されたと考えられる。